

近代人種主義と17・18世紀思想 (続)

高 田 紘 二

はじめに

I 近代人種主義の起源と発展

II 近代人種主義と17・18世紀思想

① その前提的考察

② いわゆる「劣化・退化理論」について (以上第6巻第4号)

③ いわゆる「前アダム人論」について (以下本号)

おわりに

II 近代人種主義と17・18世紀思想 (続)

③ いわゆる「前アダム人論」について

ポップキンによれば、前述の「劣化・退化理論」よりも、「もっと絶望的な種類の人種主義が、多元発生理論から出現した。」⁽¹⁾ ここでいう多元発生理論とは、人類の起源にかんする多元発生的な説明・理論であるが、このような最初のまじめな考察である、16世紀初期のパラケルススの見解のなかに、既に、近代人種主義へと発展する萌芽を見ることができる。

たとえば、パラケルススによれば、新世界の住民は『聖書』のアダムの子孫ではなくて、すべて魂をもたない、妖精、セイレン、グリフィン、およびサラマンダなどを生みだした、別の源泉をもつ。⁽²⁾ このような見解からは、新世界の住民を人間として不完全なものとして取り扱うことを、正当化する理論が生み出される可能性が生じたことは疑いない。

ところで、ポップキンによれば、「ダーウィンと [アメリカ] 南北戦争まで、もっとも完全な人種主義に基本的な正当化を与えることになった、[人類の] 多元発生理論の形態は、前アダム人理論、すなわち、アダム以前の人間が存在しており、

かれらは別の [アダムとそれ以後の人間とは] (そして不平等な) 創造の産物であるとする、見解であった。」⁽³⁾

この古典的な見解を定式化したのは、異端の神学者とされるアイザック・ラ・ペイレール (1596-1676) であり、かれは、1641年に書かれ、1655年に出版された著作『前アダム人』で、このような見解を定式化した。⁽⁴⁾ かれによれば、古代の異教の歴史からの多くの資料は、いろいろな近東の文化が『聖書』よりも古い歴史をもっていること、探検家の航海からの証拠が中国とメキシコの歴史が『聖書』の歴史から独立しており、『聖書』の歴史よりも古いことを示していること、また、エスキモウ⁽⁵⁾ (かれはエスキモウについて一研究を書いていた)、ポリネシア人、インドネシア人にかんする、人類学のデータやその他の批判的な情報が、『聖書』の既存のテキストの権威に挑戦していることを指摘した。このような挑戦にたいして、ラ・ペイレールは、つぎのような大胆な、「かれの時代で最大・最高の異端」⁽⁶⁾ と見なされる『聖書』解釈を打ち出すのである。それによれば、上述のいろいろな証拠から考えて、『聖書』は、「世界史ではなく、ユダヤ史のみを取り扱っ

ていること」は明白であり、アダム以前に、数百万の「前アダム人が存在しており、かれらはかなり恐ろしい自然状態のなかで生活していた」が、神は、「アダムを創造し、人類を救済するために、ユダヤ史を始められた。」ユダヤ史は、2つの段階をつうじて発展した。すなわち、「アダムからイエスまでのユダヤ人の選別とイエスから17世紀中葉までのユダヤ人の排除。」今や、最後の段階が生じるであろう。「すなわち、ユダヤ人の復活とその後のメシアの時代、そこでは、前アダム人、アダム人、後アダム人、[など] 万人が、かれらが何を信仰しているか、かれらがどのように見えるかに関係なく、救われるであろう。」⁽⁷⁾

ところで、このようなラ・ペイレールの見解は、かれの時代の最大・最高の異端と見なされて、非難され、自説を撤回するよう強制され、かれの本は、いたるところで焼かれ埋められた。しかしながら、近代人種主義との関連からみるかぎりでは、かれの理論は、万人（かれが前アダム人と呼ぶ人々をふくめて）の救済を主張していたのであり、ただ、人間史のこの素晴らしい最後では、ユダヤ人の集団が他よりもよりよく復活するであろうとする意味で、最小限でのみ人種主義的であるにすぎなかった。⁽⁸⁾

このように、ラ・ペイレールの前アダム人論そのものは、かれが宣言し続けたように、人類の多様性とかれらの多様な文化と歴史を説明する、多元発生的テーゼにすぎなかったが、人間の起源にかんして一般的に承認されている『聖書』の説明にたいする、その異端的な否認のゆえに、かれの同時代人のほとんどにたいして、説得力をもっていなかったように見える。しかしながら、実際には、かれの著作は、1655年以来ずっと絶えず反駁されてきたにもかかわらず、この人類・人間の多元発生論は、地理学、生物学、考古学、人類学および歴史における、『聖書』と矛盾する新発見が明白な事実として累積されていくのと並行して、『聖書』の歴史と現実の歴史との整合的な最善・最適の説明として、暗黙のうちに（『聖書』と折り合いをつけようとする立場から）あるいは明示的に（『聖書』に批判的あるいは無視する立場から）、受容され続けてきたのであった。⁽⁹⁾ 前アダム人理論が「ヨーロッパ神学の醜聞」⁽¹⁰⁾であるかぎり、ほとんどの人は、実際には、公然とは、

これを擁護しなかったにしても。

ポップキンによれば、この理論は、18世紀のあいだに、ゆっくりと復活されるようになり、19世紀に、花盛りとなった。しかしながら、その復活には、過激で人種主義的な変化・変容が、伴われていた。⁽¹¹⁾ この理論の信じがたい人種主義的可能性は、啓蒙主義の時代、もはや『聖書』をまじめに受け取らない人々のあいだで、登場し始め、これらの諸可能性は、19世紀のアメリカで、人種主義の強力な“科学的”擁護へと発展させられた。⁽¹²⁾

ところで、啓蒙主義の眼を通じてみられた、この理論の価値・長所は、人類の多様性の事実を説明し、あわせて、多様さの評価付けを容認したことであった。同じように、ビュッフォンは、生物学的種の規定を、その交雑・交配可能性のうちに見いだしていたが、このような交雑可能性基準によれば、アフリカ人、アメリカ・インディアン、タタール人、モンゴル人、ポリネシア人、エスキモウ、中国人、ヨーロッパ人、ユダヤ人、モスLEM、ヒンズ、その他もろもろのすべては、人間種の成員であることを指示していた。しかも、皮肉にも、ヨーロッパ人探検家たち、ヨーロッパ人植民者たちやヨーロッパ人奴隷商人たちは、「人間種」と認めない先住民や奴隷とのあいだに、庶出の子孫をもつことによって、ビュッフォンの主張を確定するのに十分に多量の生物学的データを生み出していた。しかしながら、このことは、たとえば、前述のもろもろのヨーロッパ人以外のすべてが「人間種」として最低限、承認されたとしても、これら「人間種」のあいだに、あるものを永久に優越させ、他のものを永久に劣等とするような、基本的で固定した相違が存在することを明示的あるいは暗黙のうちに是認する理論・見解の発生・登場を見なかったことを意味しているわけでは決してなかった。⁽¹³⁾

ポップキンによれば、19世紀全体を通じて、地理上の諸発見、化石研究、そして考古学上と人類学上の諸発見のために、前アダム人理論は、復活され続けた。メキシコ、中国、ペルウ、ヴェスヴィオス山、インディアンの教典、前歴史時代の斧等々の古い遺物の発見と発掘とは、紀元前4004年（『聖書』の年代学による人間の歴史の始まりのとき）よりも古い人類の存在を指示し続けてきてい

た。このような挑戦に直面して、いつでも誰かが、ラ・ペイレールとかれの前アダム人理論を再発見してきた。⁽¹⁴⁾

さらに、ラ・ペイレールの前アダム人理論は、もし人が進んで『聖書』の物語を犠牲にし、反故にし、決定的に対立・反抗しようとするならば、この理論によって、人間・動物そして自然にかんする経験的事実を説明することができるということで、驚くべき説得力をもっていた。⁽¹⁵⁾

さらに、これに加えて、18世紀には、思想家たちは、この理論の人種主義的価値を理解し始めていた。異なった人類の集団の別々の起源という、それ自体は没価値・評価的な経験的事実を説明するための思想・理論から、この経験的事実の説明に価値判断・評価を意識的あるいは無意識的に忍び込ませることによって、ある集団は、その創造以来、他の集団よりも劣っており、ある集団は生まれながらにして他の集団より優れているという、このような可能性が、是認されるに至った。こうして、人類の多様な起源論は、現存する人類について、それを標準・基準として、人類を価値的・等級別に判断するための、もっとも良い基礎を与える理論として、18世紀後期に復活・再登場し始めた。⁽¹⁶⁾

ここでも、登場するのは、まず、ヒュームである。

ポップキンによれば、ヒュームは、明らかに、次の理由で、人間の起源にかんする多元発生的見解を承認していた。すなわち、ヒュームは、かれの『宗教の自然史』で、人間の歴史の発展を、古代ユダヤから現代世界まで、連続的・直線的に辿る努力を全くしなかったし、ユダヤ教とキリスト教（かれはこれら二つの宗教の教義の多くが異教的な多神教から現出したものと見なしていた）とのあいだに何らかの歴史的結びつきがあるようには、事実上全く描写しなかった。また、ヒュームは、かれの『イングランド史』で、ふたたび、グレイト・ブリテンの歴史を『聖書』の歴史から引き出すという、当時の普通・一般の常識の試みに従わないで、それを、ユリウス・カエサルの侵入時代の、土着の異教的な事実状態をもって始めた。ヒュームは、「奇跡について」という論文で、かれが人間の起源の説明とユダヤ史を通じての人間の発展の説明が極端に信じがたいと思っているこ

と、そして、理性ある人間にこれを信じさせるには、奇跡を利用することになるであろうことをはっきりさせた。これらの認識と理解は、人間の多元的起源論をその基礎にもっていることを伺わせるに十分であるが、さらに、ヒュームは、かれの最初の著作、『人性論』で、“人間性”は人間の歴史的行動から観察を拾い集めることによって、また、実験的理性のニュートンの方法に従って、これから一般化を引き出すことによって、すなわち、観察された諸事例から推論を引き出すことによって、もっとも良く研究されることができると主張していた。人種問題にかんする、この種の研究の成果は、人間の相違にかんする、環境のおよび物理的な説明に答えて書かれた、「国民性について」という、ヒュームの論文のなかに、現れている。ヒュームは、この論文につけ加えられた注（この同じ文章は、劣化理論の説明にかんしても引用された⁽¹⁸⁾）のなかで、次のように、明言していた。すなわち、「わたしは、黒人と一般に他の人間種のすべて（4つか5つの異なる種が存在している）が生まれながらに白人より劣っていると思っている。白人以外にどんな他の肌の色をもつ文明化された民族も決して存在しなかったし、行動であれ思弁であれ、卓越した個人でさえも存在しなかった。かれらのあいだには、どんな独創的な製品も、どんな芸術も、どんな科学も、決して存在しなかった。他方で、古代のドイツ人や現在のタタール人のような、白人のうちでもっとも残酷で野蛮なものでさえ、依然として、勇猛さ、統治形態、あるいは他の特別な何かにおいて、かれらよりも優れた、何かをもっている。このよう画一的で不変な相違は、もし自然がこれらの人間の種のあいだに始元的な区別をしなかったならば、これほど多くの国々と時代に生じることはできないであろう。」⁽¹⁹⁾

以上のいくつかの言説から理解できるように、ヒュームは、かれの歴史の実験的な推論方法を適用しながら、もっとも低い文化度の白人でさえもある種の文化を生み出すことができたのにたいして、非白人の文明は決して存在しなかったという、いわゆる歴史的事実（きわめて一面的で独善的で偏見に満ちた）に訴えた。そこから、この状況を支配する、歴史法則が導きだされる。すなわち、重複を恐れず再度引用すれば、「このよう画一的

で不変な相違は、もし自然がこれらの人間の種のあいだに始元的な区別をしなかったならば、これほど多くの国々と時代に生じることはできないであろう。[強調は引用者による]⁽²⁰⁾

ところで、『人性論』の「非哲学的蓋然的知識について」にかんする章における、一般規則にかんする議論でのヒューム自身の分析は、反対証拠に直面しながら、いかにして、「アイルランド人は喧嘩好きである」というような、偏見に満ちた一般規則が信じられるようになるのかを、説明していた。そして、皮肉にも、ヒューム自身が、偏見がいかにして事実のもとづく証拠を踏みにじるかという、かれ自身の説明の完べきな事例であったように思われる。⁽²¹⁾

「国民性について」論文でのヒュームの見解は、非常に大きな影響力をもった。かれの縁者である、ケイムズ卿は、アメリカ・インディアンはおそらくヨーロッパ人とは別の起源をもっており、このことが後者の優越性を説明しているという、見解を提案した。⁽²²⁾ さらに、極端な人種主義者、エドワード・ロングも、明らかにヒュームの見解を念頭におきながら、かれの『ジャマイカ史』で、黒人と白人とは別の種であるということは、非常に明白「なので、盲目の人以外の誰もそれを疑うことができない。[原文のまま]」と、主張することができた。⁽²³⁾

他方で、世俗的な反ユダヤ主義、すなわち、キリスト教神学に基づかない反ユダヤ主義を正当化するために、ヴォルテイルとゲーテがこの前アダム人理論を利用した。⁽²⁴⁾

ポップキンによれば、ヴォルテイルは、前アダム人理論を信じていることを断言した最初の人ひとりであった。かれは、それを、ユダヤ人のみがアダム人であり、非ヨーロッパ人は、ヨーロッパ人よりも劣等であり、劣っているけれども、他のすべては前アダム人であるという、ラ・ペイレルの意味で、信じていた。ヴォルテイルは、アダム人が、恐ろしい不道徳性と考えているものによって、『聖書』を汚染し続けてきたがゆえに、アダム人をヨーロッパ文明の脅威と見なした。したがって、ヴォルテイルは、つぎのように主張する。すなわち、ヨーロッパは、アダム人から自己を分離し、その根源と偉大な遺産と崇高な理想とを、ヴォルテイルにとって、前アダム人世界に存在してい

ながら最善のものであるヘレニズム世界のうちに探求すべきであると主張した。⁽²⁵⁾

ゲーテの説は、ユダヤ人はアダムとイヴの子孫であるということであった。「しかし、黒人やラップランド人[と]、われわれのだれよりも優美である、ごく少数の人々はもちろん[ふくめて]、われわれ[と]は、確かに異なった先祖をもっていった。そしてまた、この貴重な友は、われわれが現在、多くの特別の点で、アダムの真の子孫[ユダヤ人のこと]とは異なっていると、また、かれらは、特に貨幣が関係するところでは、われわれすべてよりも優れていると、告白しなければならない。」⁽²⁶⁾ ユダヤ人のみがアダム人であるという、ゲーテの主張は、一転して、ユダヤ人の非難へと転化された。それによって、ドイツの理論家たちは、『聖書』の説明よりも、もうひとつ別の人類の源泉を求めることへ導かれた。かれらの解決、アリア人神話は、西洋文明のユダヤ的基礎を否定し、確かに、ユダヤ人を長年の宿敵にしてしまった。アリア主義は、すべての人々にたいするドイツ人の優越性を正当化するために最終的に利用された、積極的な前アダム人論へと転化されてしまった。⁽²⁷⁾

ところで、前アダム人理論にかんする現代の科学的な版の全面的な発展は、19世紀のアメリカの民族学者、フィラデルフィアのサミュエル・モートン博士とかれの弟子たちの仕事ともに、やってきた。さらに、かれの衣鉢は、かれの支持者、グリッドンとノットの仕事によって、それから、偉大なスイスの生物学者、ルイ・アガシの貢献によって、後を継がれた。しかしながら、19世紀アメリカでの、前アダム人理論の復活と発展とは、あきらかに、この理論がどれほど人種主義と奴隷制擁護の基礎を与えることができたかを示しているが、この詳細については、別稿に譲りたい。

ここでは、最後に、劣化理論に比べて、この前アダム人理論が、人種主義的差別について、科学的な装いをもって、絶望的な決定論を引き出すことができたことに触れておこう。

“科学的な”前アダム人論は、最初のスペインの人種主義的諸理論の意図を実現した。というのは、その最初の試みから、この理論は、なぜ白人が優越しているか、なぜ白人の非白人にたいする支配が現在および将来にわたって無限に正当化さ

れるのかを示したし、固定した永遠の基礎のうえにたつ、人種主義集団を分離した。この理論は、かれらの創造の過程をことにするがゆえに、非白人の状態を治療したり改善したりするという希望を全く残さなかった。⁽²⁸⁾

19世紀のアメリカの科学的な前アダム人論は、コーカサス人の永遠の人種的優越性を正当化する、パラダイムの事例を代表していた。そしてまた、それは、劣化理論とは異なって、前アダム人をアダム人へ転化することのできる過程が、全く存在しないがゆえに、非白人の漸進的な治療の希望のすべてを完全に放棄していた。このようにして、ラ・ペイレールのむしろ温和な理論 [メシア・ヒューマニズム] は、近代の生物学的人種主義と奴隷制正当化の“素晴らしい科学的な”理論的基礎へと転化させられていったのである。⁽²⁹⁾

おわりに

ポップキンによれば、人間が理性的動物であるという見解 (17・18世紀の啓蒙主義思想) の運命と前アダム人論の運命、このようなふたつの実例が偉大な知性の上に起こったことは、いろいろな卓越した思想家たちが異常で常道を逸脱した人種主義的見解をもっていただけではなくて、かれらが人間の多様性にかんする基礎的な説明を中立的なものから標準的・評価的なものへと変化させて行ったことを、もしも指示しているとすれば、その時には、哲学史家たちには、このような変化・転化がいかにして生じたかを詳細に追求することが要求されるであろう。⁽³⁰⁾ 本稿で取り上げたのは、このような試みの一端である。

しかし、なぜこのような変化・転化のすべてが生じたのか？ ポップキンはこの問いにたいして次のように言う。もし、われわれがわれわれの人種主義的遺産を克服することができるとすれば、わたしは、われわれが最初に人間の起源の問題が現在の人間の価値には無関係であることを理解しなければならぬと、思う。ふたつの基本的な近代の人種主義理論——劣化理論と前アダム人論——は、もちろん、現代のヨーロッパ史に起こりつつあること、ヨーロッパの拡大と第3世界の搾取を正当化するために発展させられた。それらは、人間がなぜ相違するのか、にかんする諸理論として、それぞれ、非評価的・没価値判断的なことば

で、論述されることができるのであろう。前者の理論すなわち劣化理論は、人間の状況・現象にかんする、単一発生的な説明を前提している。全人類は、単一の起源 (たとえば、中央アフリカに起源をもつ、おそらく黒い肌をもった単一の家族に⁽³¹⁾) をもち、その後の多様な発展は、劣化とか進歩とかの形態として、どんな判断・評価を下すことなくして、記述・理解することができるであろう。同じように、後者の前アダム人論から必然的に引き出される、現代の多元発生理論は、なんらかの最初のあるいは最終の結果を、良いか悪いか、優越しているか劣っているか、判断・評価を下すことなしに、人間の相違を、異なる起源から生じたものとして、記述・説明することができる。⁽³²⁾

ついで、ポップキンは、第二に、われわれが再評価・再研究すべき、重要な思想的遺産としてとして、グリゴワレ師の平等主義とアレクサンダー・フォン・フンボルトの文化相対主義を挙げている。この二人の思想のうちに、現代の人種主義を克服するために大きく貢献する、理論的・思想的な基礎となる、不公平で・不当な等級付けと評価をもたない人間観の存在が、発見・確認されている。⁽³³⁾ 最後に、ポップキンは、グリゴワレ師の言葉に関連して、アフリカの奴隷制とアメリカの強奪・略奪を正当化すべき、経済的必要が存在していたことの最重要性を指摘する。⁽³⁴⁾

ポップキンは、次のように締めくくる。結論すれば、現代人種主義の根本理論にかんする吟味は、ふたつの主要な種類の理論が非白人と非キリスト教徒集団にたいする、キリスト教徒ヨーロッパ人の優越性を正当化するために、いかにして発展させられてきたかを示したと、わたしは信じている。これらの理論の応用は、人的災害の巨大な犠牲の原因となったし、人類の多様性を、コーカサス人が最善であるにちがいないというように、説明することを意図されていたが、これらの理論の一部は、現在および将来の科学的証拠に基づいて評価されることのできる、人間の起源にかんする、中立的な科学的主張として、分離して取り出すことができる。コーカサス人の優越性を中心とする、また第3世界の西洋の支配を正当化する、残りは、完全に有効な文化相対主義と文化多元主義によって、戦われなければならない。これが実行されるまで、西洋の人種主義は、その犠牲を生みつつづ

けるであろう。グリゴワレが指摘したように、魂は、色も性ももっていないし、「肌の色の高潔さ」を信じている人々は、「羊皮紙のそれと同じ運命にあうことになるであろう」⁽³⁵⁾。すなわち、それらはぼろぼろになり・崩壊するであろう。そのとき、おそらく、われわれは、ウィルヘルム・フォン・フンボルトによって設定された目標に到達することができる。⁽³⁶⁾ すなわち、「われわれの共通の人間性を確認すること——あらゆる種類の偏見と限定思想が人間のあいだに打ち立てた、諸障害物を取り去ろうとすること、すべての人類を、宗教、民族、あるいは、肌の色を考慮することなしに、同胞・兄弟として、ひとつの大きな目的の達成にふさわしく、精神的な諸力の無制限の発展に適合する、大きな共同体として、取り扱おうとするという、それ [目的]...。こそが、社会の究極的で最高の目的である...。それゆえ、人間の内的な本質に深く根ざしており、かれの最高の諸性向によって命じられさえされて、——人間性の紐

帯の認識は、人類の歴史における、もっとも高潔な指導原理のひとつとなる。』⁽³⁷⁾

最後に蛇足ながら、付け加えておこう。ポップキンの結論にはなんの異存もないが、認識の批判は、実体・現実の批判によって補完されなければ力をもたないであろう。これ程までに、人種主義や差別にたいする批判や反論が、いたるところで強調されながら、依然として、ことあるごとに、人種主義的・差別的言辭や行動がいたるところで顕在的かつ潜在的に現れてくるのは、これらが、単なる意識や認識の問題だけには留まらなくて、これらを生み出す社会的・経済的・政治的構造が、厳然として実在していることを示している。まさしく、存在が意識を規定しているのである。それゆえに、これらの差別や差別意識を生み出す、基礎的な社会的構造（最終的には階級社会としての資本主義）にたいする根本的な批判が不可欠なのである。(了)

注

- (1) Richard H. Popkin, *The Philosophical Bases of Modern Racism*, in: Craig Walton and John P. Anton (eds.) *Philosophy and the Civilizing Arts: Essays in Honor of Herbert W. Schneider*, Athens (Ohio U P), 1974, pp. 139-40.

引用文中の [] 内の文章は、筆者（高田）が追加したものである。以下でも同様である。なお、ポップキンの上の論文については、以下では、Popkin 2 として示す。

- (2) また、ポップキンによれば、ジョルダノ・ブルーノは、16世紀の後半に、インディアン、エチオピア人、ネプチューンの洞穴の住民、ピグミー、巨人、その他大勢は、「[人間世界の残り] 同じ出自まで辿ることができないし、唯一の創始者の創造の力から出てきたのではない」ことを示唆した。Cf., Popkin 2, p. 140n11. 次のものも参照。L. Poliakov, *Le Mythe aryenne*, Paris, 1972. レオン・ポリアコフ、アリア主義研究会訳『アリア神話』法政大学出版局、1992年、174～179ページ。
- (3) Popkin 2, p. 140.
- (4) Issac la Peyrère, *Prae-Adamitae*, Amsterdam, 1655. この著作は、オランダとバーゼルで数

版発行された。英訳、*Men before Adam* は、1656年に発行され、オランダ語訳は、1661年に発行された。ラ・ペイレールの全理論にかんする詳細については、次のものを見よ。R. H. Popkin, *The Marrano Theology of Issac La Peyrère*, in: *Studi Internazionali di Filosofia* V, 1973, pp. 97-126. Cf., Popkin 2, p. 140n12. ポップキンには、ラ・ペイレールについて、次のものがある。do, *Isaac La Peyrère (1596-1676): His Life, Work and Influence*, Leiden (E. J. Brill), 1987.

- (5) エスキモウという呼び方は、かれら自身が自分たちを呼んでいる呼び方ではなく、多分に蔑称をふくんでいるという問題が、最近指摘されており、イヌイトという呼び方が採用されることが多いが、ここでは、このことをふくめて、ポップキンに従っている。Cf., Popkin 2, p. 140.
- (6) Popkin 2, p. 141.
- (7) Ibid. ポップキンによれば、「ラ・ペイレールは、最初、ユダヤの救世主がすぐにやってきて、フランス王とともに世界を支配するであろうとする、かれのメシア論を正当化することに関心をもっていた。」ibid., p. 140. 人間の多元的起源論のラ・ペイレール

版である「前アダム人論」では、ユダヤ人を除くすべての人々（ヨーロッパ人をふくめて）は、前アダム人であるが、「アダム人であれ前アダム人であれ、全ての人は、同じ生物学的素材、すなわち、同じ血と同じ肉から創造」されたと主張され、「全てのものは、来るべき世界を共有するであろうし、かれらが誰であろうとも、あるいは、かれらが何を信仰しようとも、救われるであろう。」と主張されたのであって、かれの見解のなかで、「唯一の人種主義的な側面は、アダム人（すなわち、ユダヤ人）の肉体が非アダム人（すなわち、非ユダヤ人）の肉体よりもより良く復活させられるであろうという、かれの主張である。」 Cf., R.H. Popkin, *The Philosophical Bases of Eighteenth-Century Racism*, in: *Racism in the Eighteenth Century (Studies in Eighteenth-Century Culture)*, Vol. III, Cleveland & London, 1973, p.252. 以下では、この論文については、Popkin 1として示す。

啓蒙時代における、人類の単一起源論と多元的起源論については、次のものも参照。L. Poliakov, *op. cit.* 前出邦訳、206～242ページ。

- (8) Cf., Popkin 2, p.141. ポップキンによれば、かれはまた、ユダヤ人が、神によって復活させられるとき、肌の黒さが薄れるであろうと主張したという。ibid. また、かれの理論は、「カソリックとプロテスタントの両方によって、非難された。ラ・ペイレールは、ラビの全員もまたかれの見解を否認したことに不満であった。反論・反駁は、イングランド、フランス、オランダ、ドイツの当時の多くの神学者たちによって書かれ、この理論は、18世紀を通じて反論され続けた。この理論を受け入れることを是認した論争者は、クロード・サウメイズ Claude Saumaise とジュアン・デ・プラド Juan de Prado だけであった。ラ・ペイレールから多くを借りた、スピノザは、暗黙のうちにこの理論を受容しているように見える。」 Popkin 1, p.260 n26.

(9) Popkin 2, pp.141-42.

(10) Ibid., p.142.

(11) Popkin 1, p.252.

(12) Popkin 2, p.142. これにおける、19世紀の諸議論については、ここでは、論じない。つぎを参照。

William Stanton, *The Leopard's Spots*, Chicago, 1960. Cf., Popkin 2, p.142n13.

(13) Popkin 2, p.142.

- (14) Popkin 1, p.252. ポップキンは、18世紀における、『聖書』の事実と反する叙述とその解釈について、いくつかの例をあげている。たとえば、P. Brydone, *A Tour through Sicily and Malta, in a Series of Letters to William Beckford*, London, 1773, I, 131-32. そこで、ブライドンは、ヴェスヴィウス山が少なくとも1万4千年のあいだ噴火し続けていたという証拠を論じた。「レクペロ [ブライドンのガイド] は、かれが山の歴史を書くときに、これらの諸発見によってとても当惑させられたと、私に語った。というのは、モウゼが死者のようにかれに負担をかけて、かれの研究にたいする熱意を鈍らせる。というのは、実際のところ、かれは、かれの山を、あの予言者が世界をそうしたのと同じほど、若くしようと、意識していなかったのだから。」 (ibid., p.132n28) さらにまた、フランソワ・エクサヴィル・バーティンは、アダム以前に非人間的な理性的創造物が存在していたと主張することで、化石の証拠を説明しようとしており、かれの著書 (Fracois Xavier Burtin, *Rèponse à la Question physique proposée par la Societè de Teyler sur les Revolutions generales, qu'a subieè la surface de la Terre, et sur l'anciennete de notre globe*, Haarlem, 1789) をめぐり、『月刊評論 Monthly Review, III (1790)』での議論のなかで、次のように論じられていた。すなわち、「かれ [バーティン] が、人間の種を除外すると前提しているとすると、この恐ろしい異端を有罪だとしなければ、アダム以前の地上に存在したのは、理性的な動物だと信じることになるであろう。このような異端にたいしては、前世紀の中ごろ、哀れなアイザック・デ・ラ・ペイレールが異端審問所によって大層手荒く扱われた [ことが思い起こされる]。」 (p.543) 同じ号の『月刊評論』の次のページでは、同定できない顎の骨を発見したファン・マルム博士なるものを扱っていた。すなわち、「したがって、われわれは、それが前アダム人であったとすることにいくらか疑問をもっているが、ブリュッセルの近くで発見された、この素晴らしい手斧の製作者ではないとしても、おそらく、所有者であったろう。」 (p.544)

ポップキンは、さらにつぎのような例もあげている。すなわち、ヒンズ教の教典の最初の翻訳者、ナサニエル・ブラッセイ・ハレッドは、720万5千年までもさかのぼる、ヒンズの年代記の主張に、圧倒さ

れた。この証拠は、ヒンズ教の教典が『聖書』の世界に先行しているとかれに確信させたように見えた。ハレッドは、最後に、モウゼの説明は、インディアンの資料と一致させられることができないがゆえに、正確であるかどうかは、歴史的事実の問題ではなくて、神の啓示に基づいた信仰の問題でなければならぬと、主張した。かれの [ヒンズ教教典の翻訳への] 序文を見よ。 *A Code of Gentoo Laws, or Ordinations of the Pundits, from a Persian Translation, made from the Original, written in the Shanscrit Language*, London, 1776, esp. pp. xxxvii-xliv.

以上については、すべて、Cf., Popkin 1, pp.260-61, n28.

(15) Popkin 1, p.252.

(16) Ibid., pp.252-53.

(17) Henry Home, Lord Kames, *Sketches of the History of Man*, Vol.II, Sketch 12, Origin and Progress of American Nations, p.240. また、つぎも参照。Cf., *ibid.*, Vol.I, Preliminary Discourse concerning the Origin of Men and Language, esp. pp.27,40-42, and Vol.II, Sketch 12, *ibid.*, esp.235-40.

(18) 拙稿「近代人種主義と17・18世紀思想」『研究季報(奈良県立商科大学)』第6巻第4号(1996年3月)、28ページ。

(19) David Hume, *Of National Characters in The Philosophical Works*, ed. by T.H.Green and T.H. Grose, London, 1882, III, p.252n. また、次のものも参照。Poliakov, *op.cit.* 同邦訳、235ページ。

(20) Ibid.

(21) ところで、ヒュームのユダヤ人にたいする抜きがたい差別的な偏見を物語るものとして、オランダの経済学者、アイザック・デ・ピント Issac De Pinto との交流がある。ヒュームは、かれの学識あるユダヤ人の友人、アムステルダム・ユダヤ教徒監督者委員会の議長、デ・ピントについて、「ユダヤ人であるけれども」良き人間だとして、つぎのように言及した。すなわち、「私が、ピント氏をあなたの愛顧にふさわしいと推薦するのをお許し下さい。かれは、ユダヤ人だけれども、敢えて私の友人だと呼びたい。」 Cf., David Hume, Letter to Thomas Rous, August 28, 1767, unpublished, India Office,

Miscellaneous Letters Recieved, E/1/49, fol. 66. また、ハグのイギリス大使、サァ・ジョセフ・ヨークも、デ・ピントをヨークの兄弟、ハードウィック伯へ紹介する手紙のなかで、同じ文句を使用していると言う。Cf., British Museum Ms.35368, Hardwicke Papers XX, fol.207v, letter of June 23, 1767. ヒュームとデ・ピントについては、つぎのもの参照。Cf., R.H.Popkin, Hume and Issac DePinto, in: *Texas Studies in Literature and Language*, XII(1970), pp.417-430. それゆえ、ポップキンによれば、このようなヒュームの偏見を知るならば、ヒュームが、なぜ、1766年にイギリス植民地省の仕事につくという、「良き選択」をしたかを理解することは、容易である。以上については、Cf., Popkin 1, p.258n14.

ところで、デ・ピントの名は、近代資本主義にかんする経済理論を唱道した最初の人のひとりとして、マルクス『資本論』でも挙げられている。Cf., *Marx-Engels Werke*, Vol.23, *Das Kapital*, Vol.I, S.165, N4. 岡崎次郎訳『資本論』国民文庫、①、264～65ページ。

さらに、ポップキンによれば、デ・ピントは、ユダヤ人が人間以下の人 *Untermenschen* なのかどうかについてヴォルテイルのユダヤ人にたいする偏見と渡り合って、文化と知的世界への貢献者としてスペインとポルトガルのユダヤ人たちが残した輝かしい諸業績の全てを適切に指摘していた。その時のデ・ピントにたいするヴォルテイルの答えは、ユダヤ人がかほどに聡明であれば、なにゆえにユダヤ教を放棄して哲学者 *philosophe* にならないのかと言うものであった。デ・ピントの答は、要点として、かれが、ヴォルテイルにとって四角い丸と同じようである、*un philosophe juif* ということであった。ところで、ヴォルテイルへのデ・ピントの解答が、次のものである。Isaac de Pinto, *Réflexions critiques sur le premier chapitre du VII^e tome des Oeuvres de monsieur de Voltaire, au sujet des Juifs*, Paris, 1762. この論争については、次のものを見よ。J.S.Wijler, *Isaac de Pinto, sa vie et ses oeuvres*, Apeldoorn, 1923 ; Deuxième Partie and Arthur Hertzberg, *The French Enlightenment and the Jews*, New York, 1968, pp.284, 287,291, and 361. 以上については、Cf., Popkin 1, pp.250,258-59n15.

(22) Henry Home, *op. cit.*, Vol.1, Preliminary Discourse concerning the Origin of Men and Language, esp.pp. 27 and 40-42 and Vol.II, Sketch 12, Origin and Progress of American Nations, esp. 235-40. 「もしわれわれがひとつ以上の創造行為を是認すれば、行為の反復から生じる困難な外観さえ完全に消失してしまった。」「... すべての合理的推論は、別々の創造へと導かれる。」(*ibid.*, p.240). Cf., Popkin 1, p.261n29. また、次も参照。Cf., Poliakov, *op. cit.* 前出邦訳、236ページ。

(23) Edward Long, *History of Jamaica*, II, 337. ポップキンによれば、ロングは、同書第3部第1章「黒人 [ニグロ]」における人種主義的分析のなかで、次のように設問していると言う。すなわち、「われわれは、これらの人間 [ニグロ] の本性・本質と人類の残りとのかれらの相違・異質性について熟考するとき、かれらが、同じ類の異なる種であると結論してはいけなだろうか?」(*ibid.*, p.356) それから、さらには、かれは、初期に好意をもっていた、多元発生説的説明に代わって、黒人が人類の残りよりも、存在の大きな鎖のより低位に位置し、他の人間よりもオランウータンに、より近いとする見解を擁護するに至った。Cf., Popkin 1, pp.253, 261n30.

ポップキンは、ロングと同じ見解として、チャールズ・ホワイトによって、かれの『人間およびいろいろな動物と植物における、正規の等級...』において宣言された見解、アフリカ人が分離して創造されたこと、あるいは、かれらが別の(そして劣った)人間種の科に属するとする見解をあげている。Cf., Charles White, *An Account of the Regular Gradation in Man, and in Different Animals and Vegetables; and from the Former to the Latter*, London, 1799. ロングとホワイトについては、次のものも参照。Winthrop D. Jordan, *White Over Black: American Attitudes Toward the Negro 1550-1812*, Chapel Hill (Univ. of North Carolina Press, 1968, Chap. XIII. Cf., Popkin 2, pp.144, 144-45n17. また次も参照。Cf., Poliakov, *op. cit.* 前出邦訳、236~7ページ。

(24) この問題にかんする、ヴォルテールの主要な議論は、かれの『習俗論 *Essai sur les mœurs*』や『哲学辞典 *Dictionnaire philosophique*』の、『聖

書』にかんする諸項目、および、『哲学辞典』への付論に、現れる。Cf., Popkin 2, 149n24.

(25) Cf., Popkin 2, p.149.

(26) Johann Wolfgang von Goethe, *Conversations of Goethe with Eckermann and Schrt*, trans. by John Oxenford, London, 1882 (c1828), p.332. Cf., Popkin 2, p.149.

(27) ポップキンは、これについては、次のものを挙げている。Poliakov, *op. cit.* 前出邦訳『アーリア神話』Cf., Popkin 2, pp. 149-150.

(28) Cf., Popkin 2, p.148.

(29) Cf., Popkin 1, p.253. ポップキンによれば、人種主義者たちが、このような前アダム人理論に基づく完全な治癒不可能理論にたいして支払わねばならなかった、唯一の代価は、『聖書』を、人類の歴史として、貶めることであった。このため、アメリカの南部人たちは、おおむねかれらの宗教と適合する、人種主義を公言し、モートン主義を拒否した。しかしながら、ダーウィンの進化論とゴビノォの人種不平等論は、すぐにモートン主義を克服し補充した。

モートン主義そのものも、しばらくのあいだ、1860年代のグレイト・ブリテンの人類学者たちのあいだで生き残ったし、1880年に出版された、アレクサンダー・ウィンチェル Alexander Winchell の著書『前アダム人あるいはアダム以前の人間の存在にかんする一証明 *Preadamites; or a Demonstration of the Existence of Man before Adam* (Chicago, 1880)』のなかで示された、有色人の劣等性を正当化する、豊富な源泉であるとされる、前アダム人なるものの写真は、ドラヴィダ人、モンゴロイド、黒人、エスキモウ、ホットントット、パプア人、そしてオーストラリアのアボリジニなどの写真からなっている。ウィンチェルは、ミシガン大学の地理学と古生物学の教授であった。Cf., Popkin 1, pp.253, 261n32; Popkin 2, pp.148-49.

(30) Popkin 1, p.253.

(31) 「もし、ルイス・リーキとフランスのノーベル賞授賞者、ジャック・モノォが主張したように、全人種が中央アフリカに起源をもつ、単一の家族、おそらく黒い肌をもった家族に由来するとすれば、そのときには、現在の多様な事態へと導いた、一連の突然変異が存在したにちがいないであろう。しかし、この発展は、それを劣化の形態としてか、進歩の形態としてか、判断することなしに、記述することが

できるであろう。」Popkin 2,p.149.

(32) Popkin 2, pp.150-51.

(33) Popkin 1, p.253-54;Popkin 2,152-53.

(34) Popkin 1, p.254.

(35) Henri Grégoire, *De la Noblesse de la peauou préjuge des blancs contre la couleur des Africains et celle de leurs descendans noirset sangmêlés*, Paris, 1826, p.51. これにつ

いては、次のものを見よ。Ruth Necheles, *The Abbe Grégoire 1787-1831: The Odyssey of an Egalitarian*, Westport, Conn., 1971, Chap.13. Cf., Popkin 2, p.153n30.

(36) Alexander von Humboldt, *Cosmos*, I, S.369, from Wilhelm von Humboldt, *Ueber die Kawi-Sprache*, Band III, S.426. Cf., Popkin 2, p.153.